

堂ヶ平の権現さんを探して

大生院の南方の山

堂ヶ平より大生院を眺める



1

昭和五十五年「正法寺だより」 黒森山のお不動様

(権現様)

喜来より黒森山 傾吹 大野山

私たちは、黒森山の中腹にあるというお不動様をたずねて二度の調査を試みました。一回目は一昨年六月、このときは途中病人が出た上、思いもよらない檜(かし)のバラや雑木に悩まされ、あと一步という所で失敗いたしました。

さてここで簡単にお不動様の経緯を述べておきたいと思えます。今から五十年前(昭和五年頃)のこと笹ヶ峯が東の石鉄山として再興されたころ、不動明王の遷座が計画されました。大野山を通り傾吹(カタブキ)、堂ヶ平(ドウガナル)、黒森山そして杓掛山(クツカケ)を経て頂上へ運ばれる予定でありました。人力以外には手段のない当時のことです。お不動様をかつき棒の中心に結び二人で運び上げることになりました。ちなみにお不動様の重さは約三千五百貫、百二十キログラ



2



かつての笹ヶ峰登山口の鳥居

ムはあると思われず。その上平地ならともかく、胸突き八丁の急坂を登るのですからその御苦労は、筆舌につくし難いものがあつたことでしょう。こうして一歩、一歩大地を嘗めるように傾吹を越え堂ヶ平までやって来ましたが、体力には限界があります。止(や)むを得ずこの計画を中断せざるを得なくなつたそうです。この計画に参加され、三役と言つてもよい役割、後棒を終始受けもたれた西之士居の高橋亀蔵さんが当時を思い出し

「できることなら皆が手を合わせ、御利益を頂けるようにしてほしい」と目をうるませながら当寺の世話人の明石隆重さんに語ってくれたそうです。私たちも心から当時の御苦労に感謝の意を表したいと思えます。こうしてことの次第が明らかになるに従つて二回目の調査をしなければと十一月三十日出発することに致しました。初冬のこの時期を選んだのは、下草が枯れ、落葉した後である為、歩きやすく、お不動様も見つけやすいとの意見があつたからです。私たち



傾吹のアケボノツツジ群生

は午前七時前大野山登山口を出発し、旧愛媛鉱山側の道を登ることにしました。この道は大野山上之成を通る道より急ではありますが、その分時間が短縮できるということです。旧愛媛鉱山の手前あたりで朝の柔らかな日差しが、日が高くなるにつれて向こうの山腹を下り、やがて私たち一行をつつんでくれました。一行は一昔前には何百人という人が生活していたという愛媛鉱山のトロッコ道を通り、鉱口を右に見ながら渦井川の源流である谷川の方へ下りました。大生院にもこんな美しい自然があつたのかと思う程水は澄み、アマゴの泳いでいる様子が手にとるように見える溪流沿いに傾斜を増した山道を黒森山へ駆け登るようにお不動様に向かつて進んでいきました。途中、傾吹を見渡すところあたりで昼食、皆で黒森山を見上げながら「あのあたりが堂ヶ平だ、多分お不動様はあのあたりだ」と言いつつ、時間が予定より遅れていることを気にしながら弁当もそこそこに出発しました。もうここからは遅くとも一時間内には、目的地に到着しないとダメだと

最後の急坂をあえぐように登り、ようやくシャクナゲの生い茂る横駆けの道に出了ました。やっと着いたという安心感と、さがし求めた御尊体のそばに確実にいるという張り詰めた気持ちで一杯でした。黒森山は既に落葉を済ませたカラ松やその中に点在する樹齢何百年のナラやブナの大木が立ち並び、まるで雪化粧を待つようにさっぱりとした姿を見せてくれました。やがて目的の窪地（くぼち）に着きました。曾我部さんが昔水飴（みずあめ）を飲んでいたという茶碗のかげらを見つけ、この辺らしいことを告げました。しかし容易には御尊体は見つかりません。そこで手分けをし、窪地を中心に東西南北に分かれることにしました。曾我部さんたちは、傾吹方面へ下り、残りは黒森の稜線に見える大木を目標に、そこに点在する曲がりくねった雑木の大きな根元を丹念に捜してみました。しかし目的の御尊体は見えませんでした。やがて方々へ捜索に行った方々が帰りましたが、皆首を横に振りました。堂ヶ平までくれば何とかなると信じてきたものの一同あせりの色はかくせません。時間は既に二時半をまわり、下山の時間もせまっています。山の入りは早いのです。一同失意のうちに、捜索を断念し次の機会に望みをつなぐことにし、お供えにと用意してきた大御酒をとり出して、一時、疲れを癒やしました。しばらくして誰かが「こんどは三回目じゃ、三度目の正直じゃけんこんどは絶対大丈夫じゃ」と言いました。その言葉に励まされるように腰を上げ帰途につきました。柿の成に帰ったときはもう日は沈み、わずか

に残るあかるさを頼りにやっと車まで帰還しました。車に戻ったときには、もう山上の残念な気持ちちは消え、久しぶりにふれた大自然の息吹のすがすがしさと、精一杯捜したという満足感で一杯でした。最後に忙しい中、時間をさいて参加して下さいました皆様にご心より感謝の意を捧げます。

昭和五十六年四月「正法寺だより」五十年ぶりに再会した不動尊

去る四月二十九日、再び黒森山に眠っている不動尊と再会するため、今にも泣き出しそうな空模様の中、前号で御紹介いたしました方々の他、落合地区の伊藤信義さん、下泉の曾我部初次郎さん、高橋建次さん、そして高木清さんの十名は、黒森山へ向けて出発いたしました。今回はお不動様を一度見かけたことのある伊藤さんが一緒でしたので、一同やや安心した様子で後に従いました。二時間程歩いた所で黒森山の稜線に出ました。ここが昔の笹ヶ峯参拝道です。何十年前前には、大勢の人々が御尊体を背負って上り下りした参道ですが、今は荒れはてて所々昔の名残が残っている程度になっておりました。胸突き八丁の稜線を約三〇分登った所で、前号で御紹介し



杓掛権現

堂ヶ平権現さまの

前で

上 平成三年ごろ

下 平成十二年五月



た黒森山の道に出ました。「ここなら、この前確かに来た所だ」と口々に叫びながら一同歩を早めました。坂がとぎれ今から杓掛山へと下ろうとした所で伊藤さんが「その先じゃ」と指して言いました。何と、お不動様は、私達が前回に捜した道のほんの十歩も行かない所に静かに待っていてくれたのでした。余りにも簡単な発見のため皆呆然として立ちすくんでしまいました。

暫（しばらく）くして、これが五十年ぶりに再会した御尊体だという何とも言えない感慨が湧いてきました。本当に山というのは魔物といいますが、一寸先にあるものでも、下山を余儀なくされるのです。一同御尊体のまわりを整備し、御法楽を捧げました。考えてみれば、ふとしたことからもう誰の記憶からも消えてしまったお不動様との再会を思い立ち、四年目を迎え、ようやくここに再会できたのです。かつて笹ヶ峰は、大生院の誇りとする山として、小さな子供から老人まで、登山をしていたことを思うと今は、さみしい限りです。しかし、宗教とは、昔をなつかしむことではありません。何とか先人の残してくれた知恵を現在に生かすという気持ちで、今後項上遷座に取り組みたいと思います。皆様の御協力心からお願ひ申し上げます。最後に何回もの失敗にもめげず参加してくださった方々、また御支援くださった方々に心からお礼申し上げます。